

高等学校

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

家 庭

東京都教育委員会

目 次

I	主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究内容	2
1	主題に対する基本的な考え方	2
(1)	家庭科教育の環境問題への取り組み方	2
(2)	環境のとらえ方	2
(3)	実態調査	4
2	研究の進め方	6
IV	指導事例	8
1	指導事例1 環境にやさしい消費生活を考える	8
2	指導事例2 コンビニエンスストアの利用を通して環境を考える	11
3	指導事例3 リサイクルの問題点とライフスタイルの見直し	14
4	指導事例4 リサイクルおもちゃの製作を通して幼児と交流を深める	18
5	指導事例5 調理実習を通して高齢者と交流を深める	21
V	研究のまとめと今後の課題	24

平成10年度

教 育 研 究 員 名 簿

学 校 名	氏 名
都立松原高等学校	村田雅子
都立練馬高等学校	片岡知子
都立足立新田高等学校	竹村美代子
都立農産高等学校	須永久子
都立久留米西高等学校	小林雅実

担当 指導部高等学校教育指導課指導主事 望月昌代

研究主題　　ともに生きる社会の一員としての自覚を高める家庭科の指導
——生活者の視点から環境を考える授業の工夫——

I 主題設定の理由

地球温暖化、環境汚染、オゾン層の破壊などの環境への関心が高まっている現在、学校教育においても、国際化・情報化とともに環境問題が大きな課題となっている。高校生の多くがマスコミなどを通じて環境問題についての言葉を聞いたことはあっても、具体的な行動の変化にはなかなか結びつかない。それは、大量生産・流通・販売・消費・廃棄という物資が豊富で、便利な社会へ依存したライフスタイルが背景にあることによるものと考えられる。

また、環境問題を考える時、自然との関わりだけでなく人との関わりに着目することも重要である。家族や家庭の在り方が変化し、核家族化や少子高齢化が進んでいる今日、人間同士の関係が希薄であることにも起因している。高校生の生活も、同世代の親しい仲間同士の限られた交流が多く、異なる世代の人々や地域の人々との交流がほとんどないため、自己中心的な思考や行動に偏ってしまう傾向がみられる。多くのいろいろな人たちに囲まれて生きているという実感も薄い。そこで、真に豊かな生活というのは物資が豊かで便利であることのみを示すのではなく、自然をも含めた周りの環境の豊かさ、自分たちの心の豊かさをも含むということを生徒たちに気付かせていくことが必要である。

環境教育の目的は、「一人一人が地球社会の一員として、より良い生活ができるように環境問題に関心をもち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全に参加する態度および環境問題解決のための能力を育てる」とある。さらに高等学校家庭科では「主体的、実践的な態度の育成」を指導目標の一つとしているが、主体的態度とは自ら生活課題に対応できる能力であり、社会の構成員であるという自覚の上に成り立つものである。また、実践的態度が育成されてこそ家庭科の学習目標が達成されたことにもなる。

そこで、今年度の教育研究員は、環境を自然環境だけでなく社会環境からもとらえ、生活者として一人一人の価値観や行動が環境をつくっていることや周囲の人々やものとの関わりを考え、ともに生きる社会の一員としての自覚を高めるための指導について研究を進めることにした。

II 研究の経過

5月	研究主題設定、研究計画・方法の協議	10月	研究報告書原稿の検討
6月	研究内容・方法の協議		研究授業（松原・久留米西）
7月	研究内容の協議、御岳合宿の準備	11月	研究報告書原稿の読み合わせ
8月	御岳合宿（研究内容に関する協議、 研究授業の内容検討）	12月	最終原稿の読み合わせ
9月	研究内容・授業指導案の検討 研究授業（練馬）	1月	研究発表会の準備
		2月	研究発表会

Ⅲ 研究の視点

1 主題に対する基本的な考え方

人間は今日に至るまで、自然や人々と深く関わり合いながら、生活を向上させ、私たちの生活はより豊かに、より快適なものとなった。しかし、このことは多くの環境問題を生み出す結果ともなった。これらの環境問題を解決するためには、すべての人々が環境に対する責任という観点から、個々のライフスタイルや消費生活の在り方を、問い直す必要があると考える。

環境と人間の関わりや環境問題については、小学校・中学校・高等学校を通して学習しているが、日々の生活には行動として定着していない一面がある。家庭生活と社会生活の接点を環境という視点から見直すことが求められている現代、その接点を考えて行動しようとするならば、生徒自身に地域社会の構成員、また社会の一員としての自覚をもたせることが必要である。

高等学校家庭科では、家庭生活の充実向上を図る能力と、主体的・実践的態度を育成することを目標としている。生活者としての視点から環境を考え、ともに生きる社会の一員としての自覚を高めるための指導を通して、身近な生活の中から環境に対する関心を引き出しながら、一人一人が考え、意識をもって行動につなげることこそが家庭科の目標とする自立した生活者としての第一歩であり、環境問題解決の糸口になると考えた。

(1) 家庭科教育の環境問題への取り組み方

高等学校において環境問題は、地理歴史・公民・理科・保健体育など、家庭科以外の他教科でも扱われている。現代の環境問題は一つ一つの問題を切り離して考えるのではなく、すべての問題が複雑に関わりあっている。そこで多面的な視野から問題をとらえ、解決策を見つけ出すことが必要となってくる。様々な教科の指導を通して、環境について学習することにより、生徒は問題に対応する力をつけていくものである。

家庭科の中で環境問題にどう取り組むかを考えるとき、他教科にはない独自の教科の特性を生かしていく必要がある。家庭科は生活に密着した教科であり、多様化する家庭生活や変化する社会の中で生活課題に対処し、主体的・実践的態度の育成を目指している。また生活者としての視点から環境をとらえることができ、環境問題を実生活に結び付けることができる教科であると言える。

教育課程審議会の答申によると、新しい教育課程では「総合的な学習の時間」が設けられることになった。そのねらいは、問題解決や探求活動に主体的・創造的に取り組む態度を育成するとし、その学習活動の例として、国際理解、情報、環境、福祉・健康などをあげ、家庭科の目標や内容と重なる部分が多い。この点からも、家庭科で環境を扱うことは大きな意味をもつと考えた。

(2) 環境のとらえ方

環境という言葉は、一般に地球環境・ごみ問題・大気汚染など、自然環境との関わりを示す場合が多いが、一方で核家族化・少子高齢化の進む現代社会において、人間関係の希薄さから起こる様々な問題を考えると、人と人との社会的な環境も重要な要素である。生活の価値基準を物の豊かさや利便性に重点を置けば資源の枯渇、ごみ問題、地球温暖化のように自

然破壊を招き私たちの生活はバランスを失う。家庭生活を取り巻く環境を、図1のようにまとめてみた。本来家庭生活は、自然環境と家庭環境、家族環境と地域社会環境がそれぞれ釣り合いを保ちながら営まれている。つまり、物の豊かさだけでなく、物と自然との関わり、また人と人の関わりを重視することにより生活のバランスが保たれ、真の豊かさが得られると考えた。さらに、このことは結果として、環境問題を含めた社会的な課題を全体的に把握できることにもつながってくる。

第16期中央教育審議会答申では、今後の教育の基本を『生きる力』とし、これからの子どもたちに必要なものの一つに『豊かな人間性』をあげている。これは他人を思いやる心、互いに認め合いともに生きていく態度、自他の生命や人権を尊重する心、美しいものや自然に感動する心などであり、これらは物と人との調和した環境のもとで培われるものである。また、様々な環境を通して、現在だけでなく今後の生活の在り方や生き方を生徒に考えさせる必要もある。このような趣旨に基づいて、生徒を取り巻く様々な環境に対する意識を明らかにするために、実態調査を行い、研究を進めることとした。

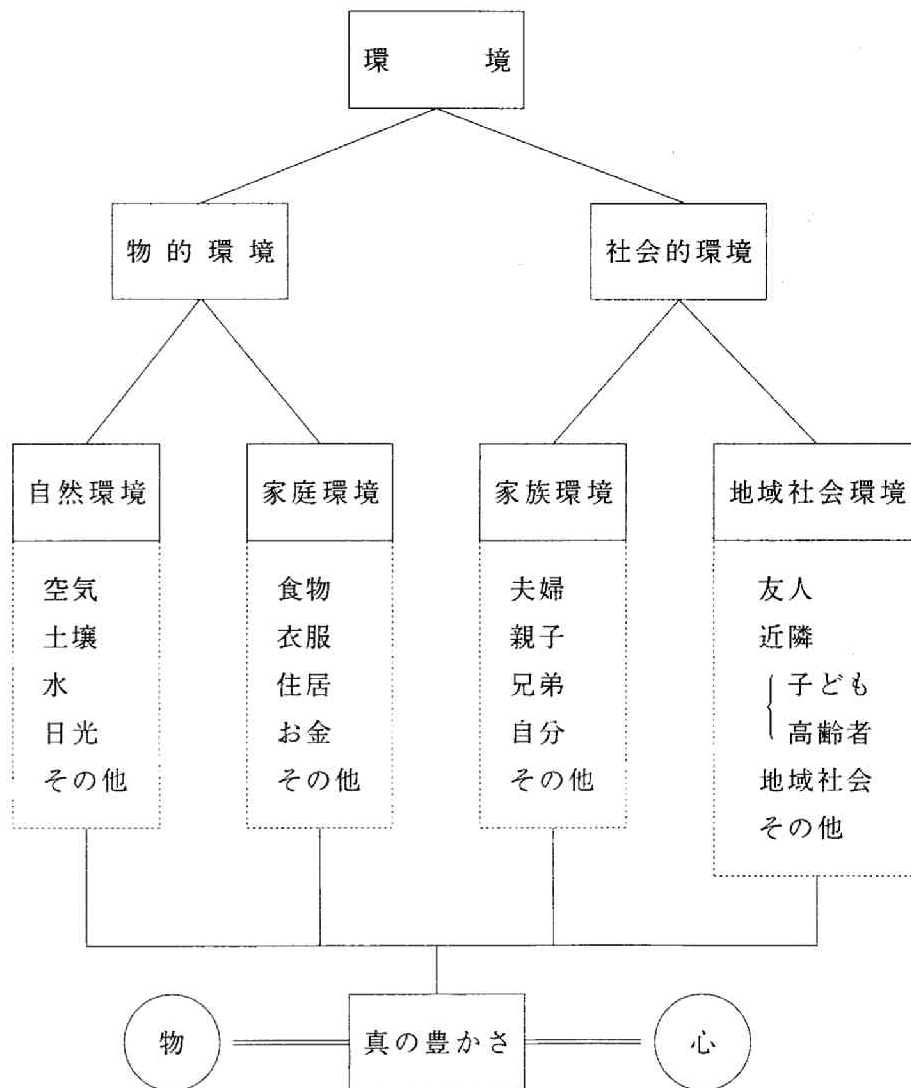


図1 環境についての考え方
 (「生活環境科学入門、生活環境学への招待」を参考に作成)

(3) 実態調査

ア ねらい 環境に関する生徒の意識や実態を調査し、環境についての指導を行うための資料とする。

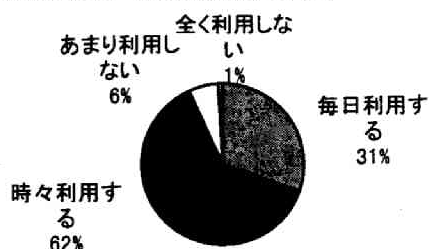
イ 対象 都立高等学校5校（普通科4校、職業科1校）第2学年

ウ 回答数 369名（男子174名、女子195名）

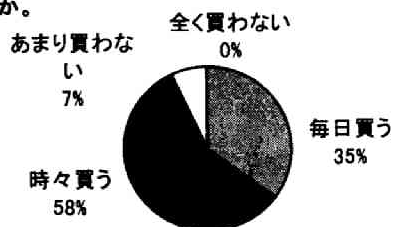
エ 調査時期 平成10年9月

オ 調査内容と分析

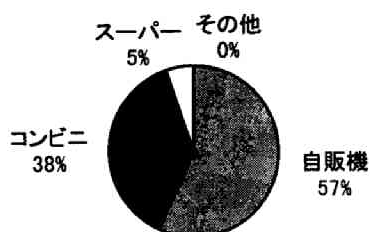
(ア) あなたはコンビニをよく利用しますか。



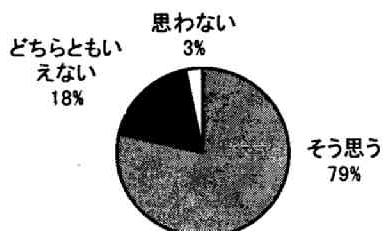
(イ) 缶やパック、ペットボトルなどの飲み物をよく買いますか。



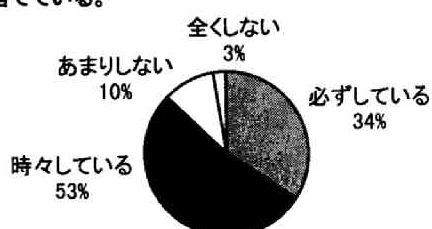
(ウ) 缶飲料は主にどこで買いますか。



(エ) びん・カンのリサイクルは大切なことだと思う。



(オ) 燃えるごみ、燃えないごみ、びん・カン等、必ず分別して捨てている。



(ア) コンビニエンスストアの利用状況

高校生の消費行動を知る手がかりとして、コンビニエンスストア利用率の調査を行った。

「毎日利用する」が全体の3割を占め「時々利用する」を含めると、全体の9割以上の生徒が利用している。このことから、日常のコンビニエンスストア利用率はかなり高いことが分かった。

(イ) 市販飲料の購入状況

日頃、多くの生徒が利用している市販飲料の購入調査の結果、「毎日買う」生徒は全体の約3分の1を占め、「時々買う」生徒を含めると全体の9割以上を占めることが分かった。

(ウ) 缶飲料の購入場所

缶飲料はスーパーマーケット、コンビニエンスストア、自動販売機など多くの場所で販売されている。調査の結果、自動販売機での購入が約6割、コンビニエンスストアが約4割であった。自動販売機の普及と設置台数の多さからも予想された結果であった。

(エ) リサイクルに対する意識

ビン・缶のリサイクル意識調査の結果、約8割の生徒がリサイクルの大切さを意識していることが分かった。一方少数ではあるが、大切さの意識がない生徒もいた。

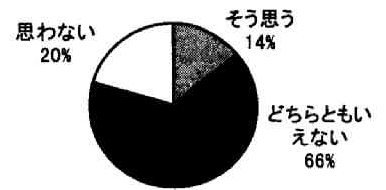
(オ) ゴミの分別率

「ゴミを必ず分別して捨てている」生徒は、約3割であった。ゴミを分別しなければならないという意識を持つてはいるが、実生活では行動が伴っていない生徒が多い。意識が行動面に生かされていないようである。

(カ) 環境と便利さ

環境・資源と便利さ・手軽さとの重要度を意識調査した結果、「どちらともいえない」が約7割を占めていた。環境保全の大切さは意識しつつも、日常生活においては、つい便利さや手軽さを追求する傾向にあるようだ。

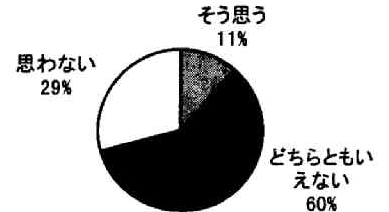
(カ) 環境や資源よりも、便利さ、手軽さ、安さ、早さの方が大切だと思う。



(キ) 環境破壊と生活レベルの維持

「どちらともいえない」が6割を占めた。環境破壊は問題だが、現在の便利な生活は変えたくないというのが本音で、判断がつかない難しさがあるようだ。

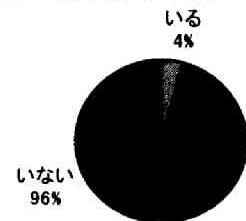
(キ) 環境破壊を進めることになっても、今の生活は変えたくない。



(ク) 乳幼児との生活

「乳幼児（0～5歳）が家族にいない」生徒がほとんどを占めている。大多数の生徒が、乳幼児との生活経験がなく、乳幼児への接し方もよく分からないことが予想される。

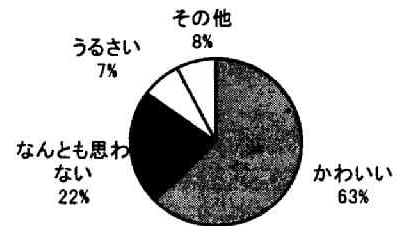
(ク) 家族に乳幼児(0～5歳)はいますか。



(ケ) 乳幼児への関心度

「乳幼児を見て、かわいいと思う」生徒が6割以上を占めた。一方「なんとも思わない、うるさいと思う」生徒が約3割であった。その他、「機嫌のよい時はかわいいと思う」という生徒もいた。

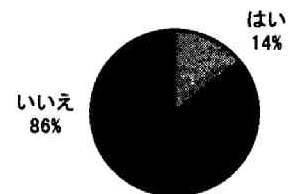
(ケ) 乳幼児を見てどう思いますか。



(コ) 高齢者との同居

「高齢者と一緒に住んでいない」生徒が、約9割と多数を占めている。高齢化が急速に進み、高齢者が増えているにもかかわらず、多くの生徒に同居経験がなく、また高齢者と接する機会も少ないと予想される。

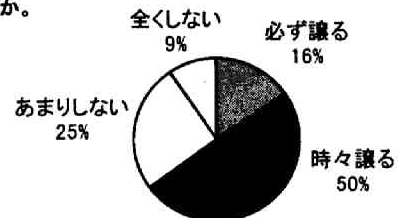
(コ) 高齢者と一緒に住んでいますか。



(カ) 高齢者などへの思いやり

電車やバスの中で、高齢者・身障者に対し席を譲るかどうかという意識調査を行った。「席を必ず譲る・時々譲る」生徒が7割弱を占め多数であった。一方「あまりしない」生徒が4分の1を占め「全くしない」生徒が約1割いた。

(カ) 電車・バス内では、高齢者や体の不自由な人に席を譲りますか。



以上の調査結果をもとに、現在の高校生を取り巻く生活環境について実態をまとめると次のことがいえる。

第一は、生徒はある程度環境問題について意識はしているが、実生活ではその意識ほど行動につながっていない。生徒は日頃授業やマスコミにより、環境問題についてかなりの情報やあ

る程度の知識を得ていると思われる。しかし日常生活においては、それが生かされず行動が伴っていない。リサイクルの大切さは意識しつつも、ゴミの分別がされず校内に空き缶や飲み残しの缶が放置されているのが現状である。このことから環境問題は、まず自分自身の身近な生活行動を見つめなおすことが必要であり、生徒に問題意識をもたせることが重要である。

第二は、現代の快適で便利な生活が、環境破壊に多大な影響を与えていることについての意識が低いことである。物が豊かで便利な社会の中で育ちそれに慣れている生徒にとって、地球規模で環境について考えることが難しい。「自分の生活のしかたや行動が環境に大きく影響する」と考える生徒は少数である。目先の生活のみならず、将来を見据えた学習内容や一人一人が環境問題に対し、小さくても具体的に行動が起こせるような指導が必要である。

第三は、社会環境・人とのかかわりにおいて、多くの生徒の周囲には、年齢の異なる乳幼児、高齢者が少ない。また日々接する年齢層も限られているため、生徒は乳幼児や高齢者に対する関心が低く、接し方も分からない状況である。自分と異なる世代の人々から、学ぶ機会も少なく、また他者を理解し思いやる気持ちも育ちにくい環境にあるといえる。

このような実態調査結果をもとに、生活者として環境を考える授業の研究を進めた。

2 研究の進め方

実態調査から分かるように、生徒は環境・資源の大切さは意識しているが、実生活の中では消費行動に走り、ごみの分別もきちんとできていないのが現状である。現在の便利な生活は変えたくないのが本音であり、環境保全に対して積極的に行動する生徒は少数である。

そこで生徒が毎日疑問も抱かずに生活しているあたりまえなことを、身近なところから見つめ直し、その中から問題点を見だし、自分の行動と環境の結び付きに気付くことが大切であると考えた。それによって、生徒に少しでも現在のライフスタイルの見直しをさせ、傍観者で自分本意だった生活者から、場面に応じた選択能力をもった生活者へと成長させていきたい。

そのためには、知識の修得にとどまらず、問題解決への態度の育成を目指し、科学に根ざした総合的、相互関連的なアプローチが必要である。実際に体験を通して学習したことは、今後抱えるであろう問題の解決に向けての、大きな足がかりとなるに違いない。

図2は生徒自らの消費結果が環境に及ぼす影響を配慮して、それぞれの消費生活を見直すことと、豊かな人間性の育成、健全でトータルな人間発達の深い関わりを示している。生徒がグローバルな視野で自己の消費生活を見つめ、社会、環境問題と関連させることで、より大きな学習の流れを作ることができる考えた。

現在の環境問題には多くの考え方があつた。たとえ、今すぐに消費生活に結び付かなくても、長いスタンスで生徒を見守り、将来、意識の高い生活者へと成長するための基礎づくりととらえたい。また、生徒が気付いたことや身に付けたことは、その後の生活に生かせるように継続した力として養成することが必要である。

また、核家族化の進行の中で、高齢者や乳幼児と同居している生徒はわずかで、特定の仲間同士のコミュニケーションしかできないように見受けられる。携帯電話などで同世代の友人とは長時間会話しても、家族とはあまり話をしないという生徒もいる。また、地域の人たちとの交流もほとんどないため他人を思いやり、広い視野をもって物事を推し量ることができず、自

分とその仲間たちとの限られた価値観で物事を判断し、決定していくという場面も多く見られる。

そこで、近隣の高齢者や幼児を招待し、調理実習や遊びを通して交流をもつ授業を計画した。普段接する機会のない異世代の人たちとの交流を体験させることにより、相手を思いやる心、共に楽しむ心を育てていきたいと考えた。このような授業を通して人間をとりまく環境をとらえていくことは、今回の研究の大きな目標である。またこのような機会を継続的にもつことにより、地域に開かれた学校のきっかけとしていくことができる。

今回は学校に招待する形で授業を行ったが、生徒が地域の施設を見学したり行事に参加するなど、様々な形で積極的に近隣の地域と交流を深めることは、これからの家庭科の大きな課題でもある。そのためには、学校全体の理解と協力を得て、教科という枠にとらわれずに特別活動やボランティアなど柔軟性のある活動を行いたいものである。また、各学校の地域の特徴を生かした取り組みが必要である。

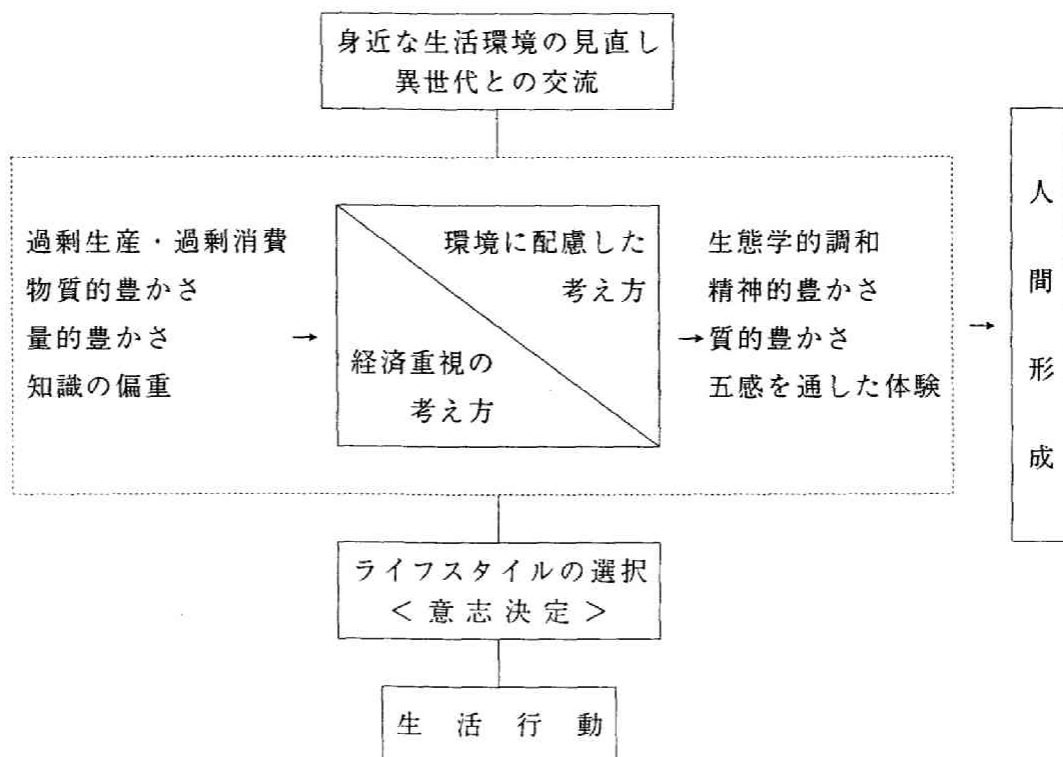


図2 生活行動と人間形成

(今村・住田「環境教育としての消費者教育に関する諸考察(2)『日本家庭科教育学会誌』第36巻第2号、1993年の図1を参考に作成)

IV 指導事例

1 指導事例1 環境にやさしい消費生活を考える

(1) 題材設定の理由

今日、地球規模の環境問題やごみ問題、また大量消費による資源枯渇などが深刻化し、このままでは将来の私たちの生活が成り立たなくなると言われている。便利さ・豊かさと引き換えに、様々な問題を生み出した、大量生産・大量消費・大量廃棄というしくみを認識した上で、環境に配慮した消費生活を考えなくてはならない。そこで、最も身近な「物を買う」という消費行動に注目し、どう物を買ひ、どう使い、どう捨てるかを見通した、環境に負荷を与えない消費行動ができるように、この題材を設定した。

(2) 学習目標

- ア ごみを減量する方法を知る。
- イ 消費行動が市場に影響を与えるものであることを認識する。
- ウ 環境に負荷を与えない消費行動、状況に応じた選択ができる力を養う。

(3) 全体計画 (11時間)

課題把握	生活と環境問題とのつながりを考える	1時間
	<ul style="list-style-type: none">・自分の生活を振り返り、環境を意識して生活しているかチェックする。・大きな環境問題も一人一人の生活とつながっていることを理解する。	
課題追究	容器・包装を見直す	4時間
	<ul style="list-style-type: none">・ビン・缶・ペットボトルの特徴やリサイクルの状況を知る。・レジ袋・トレイなどのプラスチックの特徴とダイオキシンとの関係を知る。・リサイクル・リユースについて理解する。	
	調理実習を通してごみを考える	2時間
	<ul style="list-style-type: none">・材料購入の際、その店舗の環境に対する取り組みを調査。(課外活動)・実習で出た生ごみ重量の測定・燃えないごみの回収。	
まとめ	環境にやさしい店舗探し	2時間 (本時)
	<ul style="list-style-type: none">・店舗の環境に対する取り組みの調査を発表。・消費行動とごみの関連を理解し、自分にできることを考える。	
	リサイクルの意味について考える	2時間

(4) 対象 2年 40名 (男子18名 女子22名)

(5) 授業の展開 (本時2時間)

区分	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・教具
導入 10	○本時の学習目標を確認する。	・本時の学習内容を説明する。 ・実習時に回収した燃えないごみを各班に配布。	調査用紙 燃えないごみの実物
展 開 40	○各班ごとに生ごみの重量を確認し、他班と比較する。 ○実習時に出た燃えないごみから、どのようなごみが出たか観察する。 ○材料購入の際の、店舗の調査「環境にやさしいお店探し」を発表する。 ○発表を聞き、ワークシートに記入する。	・生ごみが多い班は、なぜ多くなったのかを考えさせる。 ・食物を無駄にしない配慮も環境と関わることを認識させる。 ・燃えないごみの多さを確認させる。 ・詰め替え商品やリサイクル商品について、例を挙げる。	ワークシート 生ごみ重量測定記録 模造紙 マジック マグネット 詰め替え商品 リサイクル商品
展 開 40	○ごみを減らすためにはどうしたらよいかを考える。 ○物の流れを確認する。 (資源採取→製造→流通→購入→使用→廃棄) ○「買い物が世界を変える」を読み、買い物が環境にどう影響するかを考える。	(休憩) ・ごみ減量は、購入の際の商品の選択に左右されることを理解させる。 ・物の流れの中で、消費者として環境に配慮できる場所はどこかを考えさせる。 ・環境保全は物を買うところから始まることを認識させる。	プリント配布
ま と め 10	○店舗が環境のために取り組んでいる内容を確認する。 ○自分が店舗の取り組みに、協力しているか、また今後、環境のために自分にできる事を考える。 ○次回の内容を確認する。	・店舗が身近なリサイクルの拠点となっていることを確認させる。 ・消費者としての責任を考えさせる。 ・次回の学習の予告をする。	

(6) 評価の観点

- ア スーパーマーケット・企業などで行っている環境に対する取り組みが確認できたか。
- イ ごみを減量するためにはリサイクルばかりでなく、購入する際に環境を意識する必要があることを理解できたか。
- ウ 環境問題は、消費行動と関連していることを理解し、消費者として環境を意識した商品を選択する態度が身に付いたか。

(7) 生徒の感想

- ア 今まであまり気にせず買い物をしてきたが、普段と違った目で見ると環境に良いものやリサイクルボックスなどがあり、地球環境に真剣に取り組んでいると感じた。
- イ 結構リサイクルや買い物袋不要を呼びかけていて、環境への取り組みが進んでいた。このような小さなことでもみんなが少しずつ環境保全に取り組めば、少しでも変わらと思う。今回の調査でスーパーマーケットの裏側も少し分かったのが良かった。
- ウ 今、自分にできることは今あるものを大切に使用し、物を買うときは必要かどうかを考えて買い、使用しなくなったものはただのごみにならないように、リサイクル方法を考えたり次の利用を考えることであると思う。
- エ 環境問題・リサイクルなど、私たちがより良い生活を送っていくために考えていくことが重要になってきている。自分のライフスタイルを変えなければいけないなんて、今の怠け者の人間たちには大変なことだけれど、今やらなければ悪化の一步をたどるだけ。自分でどのようなことができるか一人一人が考えていかなければならない。

(8) 考察

- ア 調理実習での生ごみ測定を何回か連続して行うことにより、ごみ減量の意識が高まった。
- イ 生徒はコンビニエンスストアの利用が主のためか、スーパーマーケットのリサイクル状況などについてあまり認識していなかったが、店舗の調査を通して考えている以上にスーパーマーケット・企業などが、環境に対して熱心に取り組んでいることを知るよい機会になった。
- ウ 環境に対して何から始めたら良いのか分からないという意見もあり、詰め替え商品、リサイクル商品などを具体的に提示したり紹介することで、環境に取り組む実践意欲を高めることができた。
- エ 環境に対して問題意識はもっているがなかなか実践していない生徒の現状を、少しずつ無理なく変えるためにも、今後も押し付けでなく授業のあらゆる機会・あらゆる場面で環境問題に触れ、生徒の意識を揺さぶり続ける必要があることを改めて認識した。

生活と環境・家庭科
環境にやさしいお店探し調査のまとめ～調理実習を通して環境を考える

【実習で出たごみ】

生ごみ量	年 組 番 氏 名										単位：g	
	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班	9班	10班	合計	平均
	190	460	680	220	175	1000	670	450	540	500	4935g	493.5g
燃えないごみ	どのようなごみが出たか 豆腐、卵のパック、鳥肉のトレー ラップ、スーパーの袋				感想（生ごみについて） 生ごみはちっとしたことでも出さるから なるべく生ごみ減らさないように、量を減ら した方がいいと思った。生ごみはいつでも 捨てなくて、小さくならから袋を付けようと思う。				感想（燃えないごみについて） 卵のパックやトレーなどはどうして でたらごみ減らすの？リサイクルする以外 ごみは増えちゃうと思う。			

2 指導事例2 コンビニエンスストアの利用を通して環境を考える

(1) 題材設定の理由

近年、都市部ではいつでも、どこでも、欲しいものがすぐに買えるコンビニエンスストアが目につくようになった。実態調査の結果にもみられるように、若者にとっては生活に必要なものが手に入る店として、なくてはならないものとなっている。本校においても、多くの生徒が毎日の登下校の際、弁当や清涼飲料水、スナック菓子などを買うために利用している。しかし、同時に、こうした便利さと引き換えに長時間営業によるエネルギー消費や、弁当の容器や空き缶、ペットボトルなどのごみが大量に生まれて環境に多くの負荷を与えている。

そこで、便利さと問題性を抱えたコンビニエンスストアを改めて見直し、環境を意識しながら上手に利用できるよう、この題材を設定した。

(2) 学習目標

- ア 食生活を通して、自分たちの消費行動を知る。
- イ 便利な生活と引き換えに環境に負荷を与えていることを自覚する。
- ウ 日常生活のなかで環境保全に参加する態度や能力を養う。

(3) 全体計画 (14時間)

課題把握	現代の食生活を知る。	4 時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外食産業・インスタント食品の普及。 ・ 食品添加物の使用とその問題性。 ・ 家庭における「食事」の在り方の変化。 	
課題追求	自分の食生活を見つめる。	2 時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2日間の食事調査を通して食生活の実態を知り、問題点を明らかにする。 (欠食、栄養のアンバランス、コンビニエンスストアの食事など) (課外活動) 	
課題追求	コンビニエンスストアの利用と環境との関わりを考える。	2 時間 (本時)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食事調査よりコンビニエンスストアの利用の実態を知る。 ・ コンビニエンスストアの調査。(課外活動) ・ 3つのコンビニエンス(便利性)を明らかにする。 ・ 便利さと引き換えに環境に負荷を与えていることを自覚する。 	
まとめ	環境に優しいクッキング(計画・実習)	6 時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 買い物・調理・片付けの各段階において環境に負荷を与えない工夫をする調理実習を計画し、実践する。 	

(4) 対象 2年 38名 (男子22名 女子16名)

(5) 授業の展開 (本時2時間)

区分	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・教具
導 入 10	○本時の学習内容を知る。 ○調査したコンビニエンスストア名を発表する。	・できるだけ多くの生徒に発言の機会を設ける。	調査用紙
展 開 40	○3つのコンビニエンス(便利さ)について理解する。 ○便利な生活と引き換えに環境へ与える負荷を考える。 ・長時間営業による問題 消費電力、労働条件、若年者の非行・犯罪など ・コンビニ食の問題点 食品添加物の使用、家庭の味の喪失など(復習) ・大量のごみの発生 弁当の容器、ペットボトル	・日ごろ、コンビニエンスストアを利用する時のメリット(満足している点)、デメリット(不満な点)という形で考えさせる。 ・3つのコンビニエンス 立 地—学校周辺の地図をはり具体的な位置を示す。 時 間—24時間営業の実態を確認させる。 品揃え—よく買う物を発表させる。 (休憩)	学校周辺の地図 赤丸シール
展 開 40	○ビデオ視聴を通して便利さに伴うごみ問題の実態を知る。 ○調査用紙から各店舗の環境への取り組みを知る。	・ビデオに登場する人物の行動を整理させる。 ・プラスチックごみの問題性を理解させる。(ダイオキシンの毒性)ごみ分別の大切さを気付かせる。 ・調査用紙を参考にして発表させる。	ビデオ 弁当の容器 ペットボトル 空き缶 プリント エコマーク付き商品
ま と め 10	○日常生活の中での環境への取り組みを考える。	・具体的にできる事を考え、自由献立の実習で実践させる。	

◎ビデオ「東京発 新・おしゃれな暮らし—環境に優しい商品選び—」(消費者センター)

(6) 評価の観点

- ア コンビニエンスストアの調査が、主体的かつ意欲的に取り組めたか。
- イ コンビニエンスストアの便利さとその問題点を理解できたか。
- ウ 現在の自分の消費行動を見直し、今後の日常生活の中で環境への取り組みを行う態度が身に付いたか。

(7) 生徒の感想

- ア 普段、何気なく通っているコンビニエンスストアは便利で気軽に買い物ができるので、今となってはなくてはならないすごい存在ということに気付いた。
- イ 今まで気付かなかったが、スーパーやコンビニエンスストアなど何でもそろっていて、たくさんあるとつい買いすぎてしまうことが分かった。
- ウ 母は500mlのペットボトルを嫌がるけど、私は缶やパックより便利な500mlのペットボトルの方を利用している。でも、これからは毎回買わないで家の飲み物を移し替えて使いたいと思う。
- エ リサイクルなど、ちゃんとしたいと思っても時間がなかつたり、疲れていたりなどしてできないことも多いと思う。そんな中、企業がもっと積極的にリサイクル活動をしていくことがこれからは大切だと思う。
- オ 今までリサイクルなんて考えたこともなかった。でも、私は学校で缶ジュースを買ったらちゃんと「くうかん鳥」に入れているので、リサイクルに協力しているのかもしれないと感じた。(くうかん鳥・・・デポジット制を導入した校内空き缶回収機)
- カ 家ではごみの分別をしているが、子供のころに比べてごみの種類が多様が増えてびっくりした。今は、いろいろ分けて決まった日にささなければならないので大変だと感じた。

(8) 考察

- ア 調査は課外活動としたため、全員の生徒に徹底することは難しかった。しかし、多くの生徒が日常的に利用していることから、問いかけに対しては大変意欲的な反応がみられ、様々な意見を聞くことができた。
- イ 生徒は、調査を通して商品販売以外の様々のサービスを知ることができ、改めて自分の生活と密接な関係にあることを理解した。また、同時に日々の利用時の不満などを考えることにより、いろいろな問題点に気付いた。
- ウ 調査は個人作業としたが、グループごとに調査した各コンビニエンスストアの実態をまとめ発表すると更に様々な問題点が明らかになり、より主体的な活動が期待できたと思う。
- エ 使用したビデオは、便利な生活が環境問題をもたらすということを理解させ、それを防ぐためにごみの分別やリサイクルを呼びかける内容のものである。生徒にとっても身近な問題であり、興味・関心を引き出すのに効果があった。
- オ リサイクルという事柄に関しては、導入程度しか取り上げることができなかったが、多くの生徒が多少の関心をもっていることが分かった。こうした事柄を理論で終わらせることのないよう、調理実習をはじめとした今後の学習の様々な場面で取り上げ、実生活の中で自然に実践できるよう進めていきたいと考える。

3 指導事例3 リサイクルの問題点とライフスタイルの見直し

(1) 題材設定の理由

環境ホルモン、ダイオキシンなどが大きく報道され、ごみ処理の問題は住民の健康・生活環境にも大きな問題を投げかけている。昨年度、各学校での小型焼却炉が使用禁止になるなど、ごみ処理問題は身近な所でも大きな影響を与えている。現代の我が国では便利さ、手軽さ、速さ、安さを求め物質的な豊かさを求めるあまり、無意識のうちに膨大なごみを出している。今一度自分の生活環境を見つめ直し、物質的に豊かな生活の裏にある現状の問題点を確認し、自らのライフスタイルを考え直すことが大切である。一人一人の行動を変化させることは難しいが、無意識のうちに捨て続けているごみを見直すことで、生活者としての日々の行動が自分を取り巻く環境に負荷を与えていることを確認し、環境に配慮した行動がとれるようになるきっかけにしたいと考えこの題材を設定した。

(2) 学習目標

- ア 環境や環境にかかわる問題に関心をもつ。
- イ 環境に対する人間の責任と役割について理解する。
- ウ 環境の保全に自分も積極的に参加しようとする態度を養う。

(3) 全体計画 (6時間)

課題把握	環境問題とは何なのか考える。	1時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に関する言葉を挙げ、環境に負荷を与えている要因にはどんなものがあるか考える。 	
課題追求	身の回りのごみについて見直す。	2時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内のごみマップを作成する。 ・家庭のごみ、リサイクルの状況を調査する。(課外活動) 	
まとめ	ごみの行方を知り、ごみ処理問題を考える。	1時間 (本時)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみの行方についてビンゴゲームをしながら理解し、リサイクルの問題点を考える。 	
まとめ	これからの生活とごみ問題について考える。	2時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみの行方についてのビデオ視聴をする。 ・これからのライフスタイルを考える。 ・ごみかるたを作成する。 ・デポジット制度導入に対する意見交換を行う。 	

(4) 対象 2年 19名 (男子6名 女子13名 班別学習で実施)

(5) 授業の展開 (本時1時間)

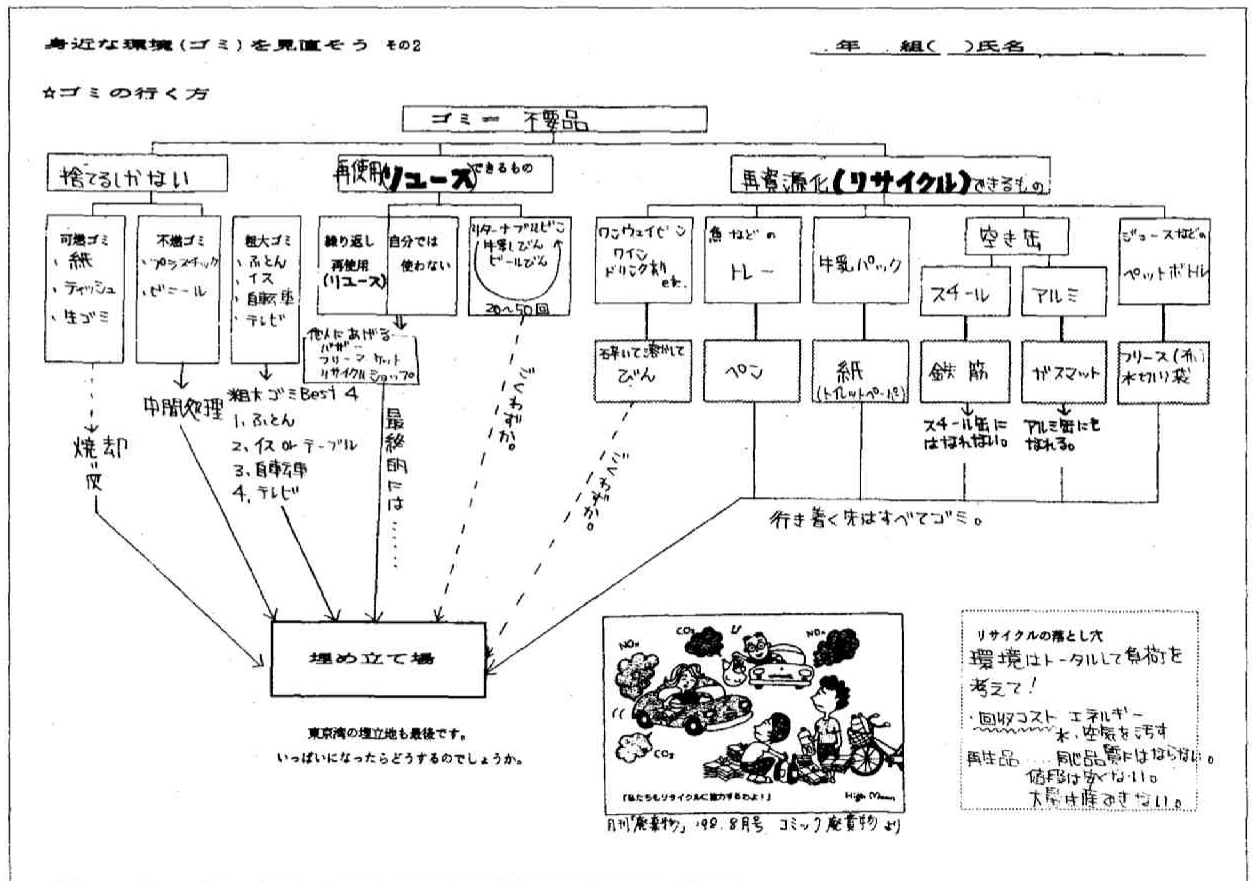
区分	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・教具
導 入 10	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習目標を知る。 ○前時までに調べたごみの現状について確認し、それらのごみの行方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内ごみマップや家庭のごみの状況 (分別方法、回収日、回収場所)を確認する。 	学校内ごみマップ 家庭のごみについての課題用紙
展 開 30	<ul style="list-style-type: none"> ○台所から出る容器ごみ (各種食品の入っていた袋、トレイ缶、ビンなど)を想像する方法でビンゴゲームをする。 ○容器ごみをその行方によって分類する。 再利用できるもの 再資源化できるもの ごみになるしかないもの ○リサイクルの落とし穴について考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・再生品に生まれ変わるのに必要なエネルギーやコストについて理解する。 ・再生品の流通の現状を知る ○リサイクルの前にごみを減らすことの必要性を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・台所から出るごみ (袋の中に入っている)を9つ、想像しながらカードに記入させる。 ・一つずつ袋から出しながら、ゲームをする。 ・それぞれのごみの行方を考えさせる。 ・リサイクル、リユースについて意味を知り、その違いを確認する。 ・ワンウェイビンとリターナブルビンを比較する。 ・グループごとに再生品と容器ごみを組み合わせる。 ・リサイクルの現状と問題点を古紙とワンウェイビン为例にビデオを見せ理解させる。 ・リデュース (減らすこと)、リフューズ (断ること)の重要性を考えさせる。 	台所から出た9つの容器ごみ ワークシート ペットボトル、空き缶、トレイからの再生品 ペットボトルの粉碎見本 ビデオ
ま と め 10	<ul style="list-style-type: none"> ○ライフスタイルの変化の必要性を理解する。 ○授業の感想をまとめ、次時の学習内容を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境問題の多面性について考えさせる。 ・次時の学習内容を知らせる。 	

(6) 評価の観点

- ア 家庭から出るごみをその行方ごとに分類できたか。
- イ リサイクルの問題点が理解できたか。
- ウ 自分のライフスタイルとごみ問題を結び付けて考えられたか。

(7) 生徒の感想

- ア 再生品が売れ、みんなが使わないとリサイクルが止まってしまうことが分かった。これからは物を買うときに再生品かどうかにも気にしてみたい。
- イ 授業で勉強したり、テレビで見たりしても、やっぱり人ごとという感じが強いと思う。自分たちが日ごろからできることはたくさんあるが、つい面倒くさいという気持ちになってしまうのが現状だろう。でもやれることからやらなくっちゃと思った。
- ウ 今の便利な生活をあまり変えたくないけど、環境のことを考えるとちょっとくらい不便になってもしょうがないのかなと思う。でもペットボトルはやっぱり便利だからなくなることはないだろう。せめて捨て方を注意したい。
- エ 個人のレベルではどうにもならないところまで来ている。遅すぎたと思うが、あきらめず小さな努力でも積み重ねていくことが大切だと思う。まずはごみの分類かな。
- オ 必要な物しか買わないこと。食べ物を余分に買わないことから実行したいと思う。
- カ なぜ日本は外国のようにできないのか。徹底した分別とか、回収とか。有料化やデポジット制度など、お金が関係すると変化するかもしれないが、お金でしか動かないというのでは情けない。



(8) 考察

ア 時間を設定し学校や家庭のごみを改めて見直すことは、生徒の関心を引き出すのに効果があった。普段ごみをポイ捨てしている生徒も、学校の中をごみを探しながら歩き回ってみることで自分のとっている行動を把握できたようだ。その後の様子からわずかではあるが、ごみの分別を意識するなど行動の変化もみられた。

イ ビンゴゲームには全員の生徒が予想以上に熱中し意欲的に取り組むことができた。またごみとリサイクル再生品の実物を目の前に提示することで理解しやすかったようだが、リサイクルの落とし穴を考えることは生徒によっては発想の転換も必要だった。

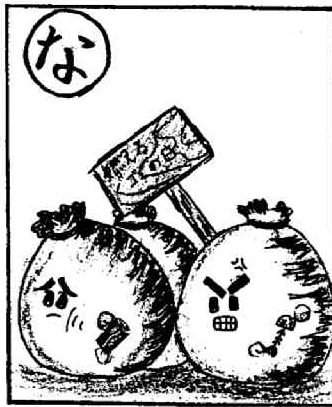
ウ まとめの段階で見たビデオでのごみ処理の現状や外国の実態に興味を持った生徒が多かった。自分が出したり、捨てたりしたごみの行方を実際に見ることの重要性を感じた。

エ 問題が身近なものだけに本音と建て前が交錯したりもしたが、生徒によっては「知らない」事も多く、現状をしっかりと理解させることがまず必要であることが分かった。

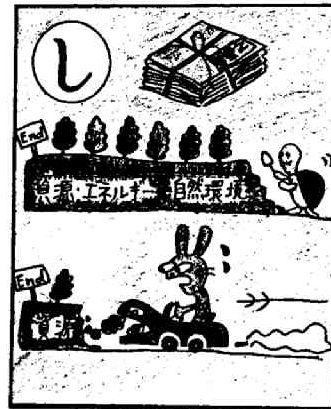
オ 自分自身のライフスタイルを見直させることはできても、価値観を変えることや行動の変化にどれくらい結び付けられるか、疑問も残った。しかし、自分一人ぐらいがという考え方の間違いは確認できたようなので、今後もいろいろな場面の中で繰り返し学習していくことで、行動の変容も期待できると思う。

カ 生物や現代社会など他教科でもほぼ同時期に環境に関する学習をしているので、それらの教科との関連性など教員同士の情報交換や《総合的な学習》に向けての取り組みが必要であり、生徒にとっては一層の学習効果も期待できることを感じた。

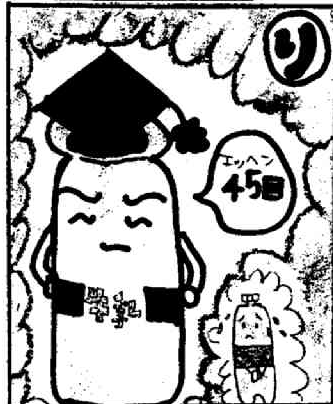
生徒製作のごみカルタ



なぜ入れる
燃えるゴミの日守ろうよ



新聞紙集めて再生リサイクル
できることから始めよう



リターナブルの牛乳ビン
四十五回も使えるよ



スーパーに買い物に行くその時は
さいふともしっかりにマイバック

4 指導事例4 リサイクルおもちゃの製作を通して幼児と交流を深める

(1) 題材設定の理由

生徒たちは毎日のように牛乳パックやペットボトルを購入し、ごみとして捨てている。この身近な素材を子どものおもちゃとして見直すことができたなら、ごみに対する概念が変わるのではないかと考えた。またおもちゃを製作することにより創意・工夫することの楽しさを学ぶとともに、生徒同士の交流にも発展させていきたい。さらに、学校に保育園児を招待して製作したおもちゃで遊ばせその反応を見ることで、普段接することの少ない異なる世代の人と共感し合える心、思いやる心を養いたいと考え、この題材を設定した。

(2) 学習目標

- ア おもちゃとしてリサイクルできる素材を発見する。
- イ おもちゃの製作を通して創意・工夫する楽しさを味わう。
- ウ 様々な作品に触れることにより、リサイクル利用の可能性の広さに気付く。
- エ 幼児との交流を通して幼児の生活やおもちゃの役割について理解を深める。

(3) 全体計画 (10時間)

課題把握	幼児にとっておもちゃとは何か考える	2時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの時に遊んだおもちゃを分類する。 ・年齢によって遊び方やおもちゃの種類が違うことを知る。 	
課題追究	リサイクルおもちゃの製作	2時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある牛乳パックなどで作れるおもちゃを考える。 ・材料を集め、おもちゃを作る。 	
	文化祭に保育園児を招待する準備	2時間
	文化祭で園児と交流	学校行事 2日間
	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の興味に応じて製作したおもちゃで遊ぶ。 	
まとめ	まとめと考察	2時間 (本時)
	<ul style="list-style-type: none"> ・どんなおもちゃが喜ばれたか。 ・園児との接し方はどうだったか。 ・来年度に向けて課題の整理をする。 	

(4) 対象 3年「保育」選択受講者22名（男子5名 女子17名）

(5) 授業の展開（本時2時間）

区分	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	教材・教具
導 入 10	○本時の実習内容を確認する。 ○文化祭での交流のポイントを 確認する。	・文化祭に訪れた保育園児の数 と2日間を通しての交流の様 子を伝える。	写真
展 開 40	○文化祭のビデオ視聴を通して 子どもとの交流を見直す。 ○班に分かれて文化祭の感想を 述べ合う。	・各場面の時間と状況を説明す る。 ・登場している生徒にコメント させる。	ビデオ
展 開 35	○5歳児と0歳児では遊びがど のように違ったか、おもちゃ はどのように使われたかを、 話し合う。 ○話し合いの結果を発表する。 ○発表を聞きながら、要点をま とめの用紙に記入する。	（休 憩） ・班を巡回し、助言する。 ・キーワードを板書する。	まとめの用紙
ま と め 15	○次回、子どもを招待する際に 注意する点、用意したい物、 企画などを考える。	・まとめの用紙に記入させる。	

(6) 評価の観点

- ア おもちゃとしてリサイクルできる素材を発見できたか。
- イ おもちゃの製作を通して創意工夫する楽しさを味わえたか。
- ウ 様々な作品に触れることにより、リサイクル利用の可能性の広さに気付けたか。
- エ 幼児の生活やおもちゃの役割について理解を深めることができたか。

(7) 生徒の感想

- ア 今まで私の中で牛乳パックはごみでしかなかったのがごみではなくなった。
- イ 広告紙の剣、人気アニメの折り紙などその場で作ってあげるおもちゃが人気だった。割り箸鉄砲やパクパク人形など相手と遊ぶおもちゃもうけていた。

ウ 模造紙を貼って一緒に絵を描くことは、その場で思いついたが子どもたちはリラックスして楽しそうだった。

エ 小さい兄弟がいる人はさすがに子どもの扱いがうまく感心した。

オ 赤ちゃんをだっこできてとても嬉しかった。

カ 高校が児童館になった2日間だった。お菓子や飲物も用意してあげたかった。

キ 次回は部屋を暗くしてビデオを流したり、ゲームやダンスをやってみたい。

(8) 考察

ア 平常の授業と違い文化祭に招待したことで、「保育」受講者の生徒のみならず学校全体の生徒が様々な形で園児と接することができた。休日のため幼児は個々に保護者と共に来校したため、生徒と保護者の交流が生まれたことは更に有意義なことであった。

イ リサイクルの活用については特に牛乳パックと広告紙について、生徒は見直せたようである。もっと時間をかければ大規模なおもちゃが製作できたと予想されるので今後の課題としたい。

ウ 保育園の先生方が大変協力的で、園児一人一人に生徒の招待状を手渡してくださったので予想以上の園児が来校してくれたが、事前に来校人数や時間の予想が付かず準備が難しかった。生徒によっては担当の時間に一人も子どもが来ず待ちぼうけに終わった者もいた。部活動や生徒会の活動が忙しく交流が全くできなかった生徒もいて残念だった。

エ 今回は初めての試みであったため不備な点が多く、最低限のことしかできなかったが来年は1学期から準備を始め牛乳パックの家やおやつ作り、人形劇などもしていきたい。また今後は定期的に保育園との交流をもち、様々な試みをしていきたい。

(9) 備考

ア 製作したリサイクルおもちゃ

牛乳パック…パクパク動物(かに、うさぎ、ひよこなど)、ブーメラン、ブンブンごま
広告紙…剣、手裏剣(変形して8角形になる)、ペットボトル…ガラガラ、マラカス
人気アニメの折り紙、割り箸鉄砲、竹とんぼ、紙コップ人形、針金人形、タオルの枕

イ 来校者

区立保育園年長組 園児 14名

卒業生の子ども(乳児) 4名

生徒の兄弟(幼児) 1名

小学生 1名

※すべて保護者と同伴



5 指導事例5 調理実習を通して高齢者と交流を深める

(1) 題材設定の理由

食物領域の調理実習は、生徒にとって作る楽しさや食べる喜びがある体験的な授業である。しかし現代の食生活を振り返ってみると、調理技術の習得の他にも、多くの問題がある。生活スタイルが多様化し、家族がともに食事をするのが難しくなっている。また調理済食品の普及により、家族がそれぞれ違うものを食べる傾向も見られる。このような暮らしの中で、家族の関係や、人と人との関係も変容してきている。さらに高齢化が急速に進むなか、高校生にとっては高齢者と触れ合う機会も少なく、高齢者の現状を理解することは、きわめて難しくなっている。そこで調理実習を通し、地域の高齢者と交流をもち、高齢者の経験や生活の知恵を学び、現代の生活環境を見直したいと考えた。さらに、高齢者に対する理解を深め、支え合う家族・地域社会の一員としての自覚を高めていきたいと考え、この題材を設定した。

(2) 学習目標

- ア 高齢者向きの調理を考え、工夫する。
- イ 会食をともにし、高齢者の生活や、現状を知る。
- ウ 高齢者を通して、家族・地域社会に目を向ける。

(3) 全体計画 (10時間)

課題把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">高齢社会と高齢者の現状を知る</div> <ul style="list-style-type: none"> ・身近にいる高齢者の様子を観察する。(課外活動) ・高齢者の心身の特徴を知る。 ・高齢者擬似体験をする。(シニア体験、車椅子体験) 	2 時間
課題研究	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">高齢者の健康と食事について考える</div> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者に必要な栄養と献立を考える。 ・交流授業の計画、準備をする。 	3 時間
研究	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">調理実習を通して高齢者と交流する</div> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者に授業参観してもらい、会食をともにする。(第1回) ・高齢者とともに調理実習し、会食する。(第2回) 	4 時間 (本時)
まとめ	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">交流授業での体験をもとに、高齢者に対する理解を深める</div> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者から学んだことをまとめる。 ・高齢者に対して自分ができることは何か考える。 	1 時間

(4) 対象 3年「食物」選択受講者 18名（男子5名 女子13名）

(5) 授業の展開（本時2時間）

区分	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	備 考
導 入 10	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を確認する。 ・材料、用具を準備し、調理手順の確認をする。 ・高齢者を迎える 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を確認させ、衛生的で安全に楽しく進められるよう指示する。 ・実習プリントをもとに、グループで能率的に進めさせる。 ・高齢者の方を安全に調理室まで誘導させる。 ・高齢者の紹介をする。 	実習プリント
展 開 80	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて準備をする。 ・高齢者に実習内容を説明する。 ・調理実習を進める。 ・各グループで調理した料理を器に盛る。 ・試食、歓談 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者に各グループに分かれてもらい、参観をお願いする。できれば実習にも参加していただく。 ・実習内容をわかりやすく説明させる。 ・生徒に、高齢者の安全確認を徹底させる。 ・食べやすい盛り付けに配慮させる。 ・グループ内で、できばえを話し合わせる。 	実習用具 実習材料 食器など
ま と め 10	<ul style="list-style-type: none"> ・できばえ・感想を述べる。 ・高齢者を送る。 ・あとしまつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の発表後、高齢者から感想を述べてもらう。 ・高齢者の方を、丁寧に送らせる。 	アンケート用紙

(6) 評価の観点

ア 高齢者の健康に配慮した献立を考え、工夫することができたか。

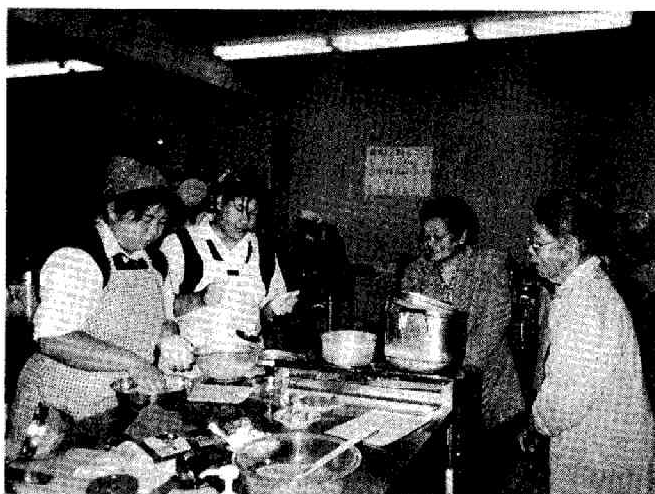
イ 交流を通して、高齢者に対する理解が深められたか。

ウ 地元の高齢者を通して、地域社会に目を向けることができたか。

(7) 生徒の感想

ア 今まででは自分の作ったものを知らない人に食べてもらうことがなかったけれど、今回人のために作って「おいしい」と言われ、すごくうれしかった（第1回）。

イ 私たちとは食べているものや、食べる量などが違うから、どうすればいいとか、どうしたら喜んでもらえるかなど、いろいろ考えて作った（第1回）。



- ウ 何を話して良いのか、分からなかった（第1回）。
- エ 1回目の交流授業より会話がはずんで、とても楽しかった（第2回）。
- オ 楽しみにして来て下さるので、好感がもてた(第2回)。
- カ 失敗に、文句ばかり言わないでほしい。もっとほめてほしかった（第2回）。

(8) 高齢者の感想

- ア みなさんの作っている様子が、自分の孫たちのようでした。本日はありがとうございます(83歳)。
- イ 生徒が素直で、はきはきとし、耳をかたむけて話にのって下さり楽しい時間を過ごしました。(66歳)。
- ウ 問いかけに対して笑顔で答えてくれることに、とても感激いたしました。ふれあいができたことがうれしかったです(69歳)。
- エ 今まで遠くにあったと思われていた学校が、とても身近に感じました(69歳)。
- オ 大変楽しい、一時を過ごさせていただきました。話し合いながら調理ができて、良かったです(66歳)。
- カ 今後とも地域とのコミュニケーションの方法を計画下さいませ。お力になることは、大いにやりたいと思っています（75歳）。

(9) 考察

- ア 交流授業は1学期、2学期に各1回ずつ実施した。第1回目は高齢者の年齢層が高いため（平均年齢82歳）実習を参観後、一緒に会食した。お互いに初対面でごちみなさはあったが、高齢者の方々からとても喜ばれ、生徒もうれしかったようである。しかし会食の時、生徒自ら話しかけるのは難しく、高齢者の方も生徒にどう声をかけたら良いか戸惑う様子も見られた。会食のみの場合は、事前に話題や雰囲気にも配慮をしなければならないことが必要であると分かった。
- イ 第2回目は、調理実習に参加してもらったため、話す機会が増えた。会食の時も、自然に話せる場面が多く見られた。生徒の感想にも「2回目の方が楽しかった」が多かった。でき上がったものを一緒に食べるだけでは、交流に限りがある。高齢者から生活の知恵などを自然に引き出すには、調理実習から一緒に参加することが必要である。
- ウ 交流授業では生徒がいつもの授業に比べて、緊張し張り切って作っていた。実習授業で生徒に、「人のために調理すること」の大切さを学ばせることができたと思う。また生徒にとって高齢者からほめられること、励まされることも、意欲の向上や人への思いやりにつながると感じた。
- エ 事前学習として、高齢者擬似体験や車椅子体験をさせた。ほとんどの生徒が初めての体験に興味をもって取り組んでいた。高齢者や体の不自由さを理解する上で、この体験は大いに役立つと思う。
- オ 高齢者にとって無理のない実施時期や実施時間を考慮する必要があることが分かった。
- カ 今後の課題として、高齢者の年代に応じた交流のしかたを工夫することが必要であると思う。また地域と連携し、協力してもらえる高齢者との関係を築いていくことが大切であると思う。

V 研究のまとめと今後の課題

本年度の教育研究員は、「ともに生きる社会の一員としての自覚を高める家庭科の指導」を主題に生活者の視点から環境問題を考える指導内容・方法の工夫について研究した。

社会を構成する生活者の一人であることを自覚するためには、一人一人の生活が環境をつくっていること、つまり自然環境を変えているのも、周囲の人々との人間関係を形成しているのも、基本にあるのは個人の行動そのものであると考えた。そこで生徒一人一人の行動を見直すことが必要であると考え、日ごろの消費活動やごみ処理について調査などの体験活動、実習を中心とする生徒が主体になる授業を試みた。また、環境はいろいろな人との関わりからつくられるものととらえ、自分たちとは異なる世代との交流を通してともに同じ社会を生きる一員であることを実感できるような授業を行った。

指導事例1では、店舗の環境調査を通してスーパーマーケットや企業などの環境に対する取り組みを知り、ごみの減量化を考える中で、消費者として環境を意識した商品を選択できる力の育成を図った。

指導事例2では、食生活とコンビニエンスストア利用という消費行動を結びつけ、便利な生活と環境問題について考えさせた。身近な問題設定に、生徒は興味を持って意欲的に取り組み、環境問題を自分自身の問題として自覚させることができた。

指導事例3では、身近なごみ問題について見つめ、生活から出るごみの行方を確認することを通してリサイクルの問題点を考え、個々のライフスタイルについて見直しを図った。当たり前前のようにも見逃していたことを生徒に再認識させ、消費生活や行動様式の変化にまで影響を与えることができた。

指導事例4では、リサイクルおもちゃを製作することにより、日ごろ無意識に捨てているものに新たな価値を見いだせた。また、それを使って実際に保育園児と交流することを通してものや人を思いやる心を育てることができた。

指導事例5では、調理実習を通して、地域の高齢者と交流し、高齢者の生活の現状を考えさせた。日ごろ接することのほとんどない高齢者と実習や会食をともにすることで、人や地域との関わりを認識させることができた。

これらの実践を通し、生徒一人一人が消費行動を見つめ直したり、日ごろあまり接することのない人々と一緒に過ごすことで、生活体験の乏しさを補いながら、自分も社会を構成している一員であるという自覚を高めることができたと思われる。明確な行動の変化となって表れることには時間がかかるが、生徒がこれからの生活の中で求められる場面に応じた選択能力を養う力を付けることができた。また、物と人が調和した環境づくりや、真の豊かさとは何かなどについて考える機会をつくることができたと思う。一方で、授業の中で教員自身の生活観や価値観が問われることも多く、時代の変化に対応していく能力や広い視野をもつことが教員にも要求されていることを感じた。

今後はさらに幅広い世代の人々との交流体験を継続していくことや、他教科との関わりをふまえた総合的な学習も視野に入れた研究をしていくことが必要であると考えます。